

教時新報

定 價 1部 220円(本体 200円+税共 283円)
予約購読料 1年分 税共 3,962円
紙代のみ 3,080円
振替 00140-9-145275
本紙を購読ご希望の方は、前金を
そえて、お近くのキリスト教書店
へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内 電話03(3202)0546
FAX 03(3207)3918
URL <http://uccj.org>
発行人 綱中彰子
編集主筆 嶋田恵悟
印刷所 株式会社かんし



高知教会（四国教区）

人々は長い間、食事をとっていないかった。そのとき、パウロは彼らの中に立って言った。「皆さん、わたしの言ったとおりに、クレタ島から船出していくなければ、こんな危険や損失を避けられたにちがいありません。しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。わたしが仕え、礼拝している神からの天使が昨夜わたしのそばに立って、こう言われました。『パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ。』ですから、皆さん、元気を出しなさい。わたしは神を信じています。わたしに告げられたことは、そのとおりになります。わたしたちは、必ずどこかの島に打ち上げられるはずです。」

(使徒言行錄27章21 ~ 26節)

パウロは、危険な考え方を広めているとの嫌疑で逮捕され、ローマまで船で護送されることになりました。順調とは言えないと、航海が続きますが、ようやくクレタ島に到着することができました。しかし、既に航海には適さない冬に入っています。

た。それにもかかわらず
船は出航することになつ
たのです。

この選択は、必ずしも間違いとは言えないものでした。今いる港は冬を越すには適当ではなく、しかも、航海に最適と思える風が吹いてきたから

嵐の中での希望を持ち立ち上がる

使徒言行錄 27章 13節



黒田 若雄

い状況の中に立たされて
いると言われます。日本
のほとんどの教会がこの
少子高齢化という現実の中
に置かれているとすれば、
それは神からの問いかけで
あり、神はこの現実を通して、
教会に大切なものを示そうとしてお
られるのではないかと思
うのです。大切なものの、
それは、教会を真に導く

のは神であることです。高知教会は、1885年に設立されました。東京や大阪から遠く離れた、人口も多くない地域で、伝道の可能性が高いようには思えなかつたはずです。しかし、高知での伝道の歩みは、携わった人たちの思いを超えて進みました。ある宣教師は本国に送った手紙の中で、「高知で行った伝道は、」

を他の地域で実行しようとしたが、不可能だった」と書いています。つまり、唯一無二の伝道が、この高知で進められました。当時の感覚で言えば、「中央」から離れた地方において起こった伝道の展開を、宣教師は驚きを持つて受け止めました。そして高知教会は歩み始め、神によって導かれ、140年の歩みを重ねて

きました。これは、高知教会だけの姿ではなく、それぞれの教会の姿でもあることを思います。それぞれの教会は、今まで導かれて歩んできました。それならばこれから先の歩みはどうなるのでしょうか。この船のよみに、嵐に巻き込まれる時もあるでしょう。その時に自分たちの力で展望を自分で進んでいくのです。

神の導く恵みの船路を進む教会

ないのです。嵐に遭つても、必ず打ち上げられる岸があることを忘れずに

パウロは、この船の中でただ一人希望を持ち続けられたのでしようか。そうではありませんでした。「ついに助かる望みは全く消えうせようどしきでいた」の「助かる望み」は、聖書の元の言葉に遡ると、「私たちの助かる望み」とあります。つまり助かる望みはなくなつたのではないからと思っていいのです。これは、使徒言行録を記すルカだけではありませんでした。ルカが使徒言行録で「私たち」と表現する際には、パウロを含めて「私たち」と言いまして、「私たち」といふ意味で、パウロは、この船の中でただ一人希望を持ち続けられたのでしようか。

す。ですから、ここで「助かる望みはないのでは」との思いは、ルカだけではなく、パウロの思いでもあったのです。パウロもまた絶望の中にいました。

しかし、そのパウロは立ち上ります。パウロ

が立ち上がるここには大きな理由がありました。パウロが皆に「元気を出しなさい」と言う前に、神からの使いが「恐れられるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければなりません」と語りかけます

とを示されました。注目したいのは、パウロに神が示されたのは、嵐を乗り越えていけるような処方箋のようなものではありませんでした。示されたことはただ一つです。「皇帝の前に出頭する」つまり、自分た

必ず実現する神の計画

です。この時との思ひ出航しますが、その後嵐に襲われます。ですから、乗船している人たちにとって、予想外の事態でした。船員たちは、船を軽くするために、積み荷や船具を捨てます。この嵐の中で最大限の努力をします。しかし、何日も続く嵐の中で、多くの人たちは、助かる望みをいのではないかと思つていきました。

中で、パウロが立ち上がり、現実の中に立たされることはあります。岸に立つた時、誰もがこの時のパウロの姿が心に残りますが、自分に置き替えればどうでしょうか。私たちも、人生の歩みの中で思いも出しなさい」と。そして、食事をすることを勧めます。パウロのこの声は、混乱に飲み込まれていた船にある落ち着きを与えました。そして、嵐の中を進んでいく大きな力となりました。

誰もがこの時のパウロの姿が心に残りますが、自分に置き替えればどうでしょうか。私たちも、人生の歩みの中で思いも出しなさい」と。そして、食事をすることを勧めます。パウロのこの声は、混乱に飲み込まれていた船にある落ち着きを与えました。そして、嵐の中を進んでいく大きな力となりました。

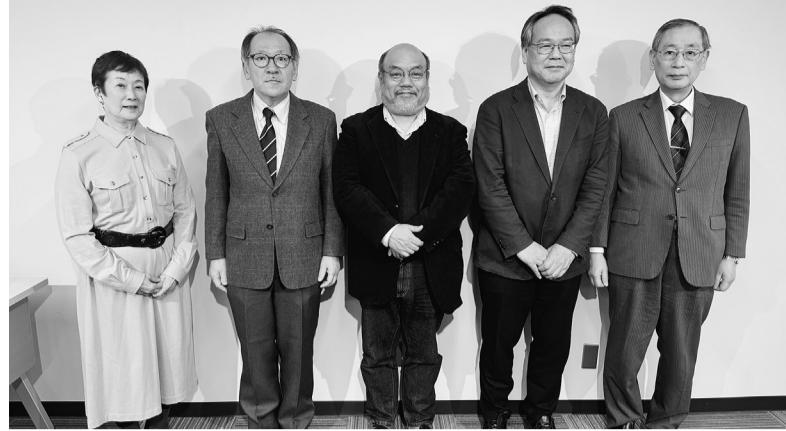
誰もがこの時のパウロの姿が心に残りますが、自分に置き替えればどうでしょうか。私たちも、人生の歩みの中で思いも出しなさい」と。そして、食事をすることを勧めます。パウロのこの声は、混乱に飲み込まれていた船にある落ち着きを与えました。そして、嵐の中を進んでいく大きな力となりました。

誰もがこの時のパウロの姿が心に残りますが、自分に置き替えればどうでしょうか。私たちも、人生の歩みの中で思いも出しなさい」と。そして、食事をすることを勧めます。パウロのこの声は、混乱に飲み込まれていた船にある落ち着きを与えました。そして、嵐の中を進んでいく大きな力となりました。

ないのです。嵐に遭つても、必ず打ち上げられる岸があることを忘れずに歩むのです。その岸は、私たちが思う岸とは違うかもしません。しかし、神が尊かれる以上、それは希望の岸なのです。

そして、教会が嵐に見える現実の中を歩んで行くために、神は、私たちに大切なものを与えてくださっています。言葉、それも語りかけられる言葉です。厳しい状況の中でも、神が私たちに語り続けてくださるのです。そ

うして、私たちは聞かれる。神の御声に聞く時に、先行きを見通せない現実の中で、神の将来を望み見て進むことができるので。そして、思ひもしない岸に打ち上げられる経験をし、神の御業の豊かさを知らされるのです。教会は、これまでこうして歩んできましたし、これからも歩んでいくのです。教会という臥龍は、神の導く恵みの船駆進を進み続けていくのです。



左から、河田、豊川各委員、久世書記、黒田委員長、藤掛委員

左から鈴木齋監査、吉澤、宇田委員長、川村書記、服部能幸監査。
ズーム画面上段左から、田村、佐野各委員、下段左から、工藤委員、長島恵子監査

ははじめに、各幹事から報告が行われた。網中彰員会組織は次の通り。委員長・宇田真、書記・川明子、田村毅朗、吉澤永。なお、常任委員会（3名）の委員には職責上、委員長と書記のほか田村委員を互選した。

村尚弘、工藤俊一、佐野第43回総会期第1回予算報告が行われた。網中彰員会組織は次の通り。委員長・宇田真、書記・川明子、田村毅朗、吉澤永。なお、常任委員会（3名）の委員には職責上、委員長と書記のほか田村委員を互選した。

1月21日、第43回総会期第1回教団機構改定検討委員会が教団会議室で開催された。この委員会は昨年12月の第1回常議員会で設置が決定され、黒田若雄・藤掛順一・久世昭夫の5名が委員として選任されていた。

審議にあたり、委員長に黒田若雄、書記に久世そらち・河田直子・豊川昭夫の5名が委員として選任されていた。

委員会は「常議員会の意向をふまえて委員会活動を行う」、「第43回教団総会における決議『日本基督教団の全体教会としての一体性を確認する件』に明らかにされている教団形成の基本姿勢を土台

とし、将来的に予想される教団所属の諸教会・伝道所の教勢および財政力の低下を見通した教団機構の検討を目的とする」ことを確認した。

日本基督教団では第15回教団総会（1968年）において「機構改正」がなされ、現行の教団組織・

機構はこれに基づいてい

る。第33回総会期以降、何度か機構改定について検討され、答申や資料がまとめられてきた。今回の委員会では、まずこれら

の先行する機構についての検討の経緯と資料を確認し、機構改定の具体的な課題について理解をはかつた。

▼予算決算委員会▲

今期の組織、委員会予定を協議

これまで教団の機構について検討された際、いずれの機会においても教団総会について検討していくこととした。

2026年秋に予定されている第44回教団総会に機構改定に関する何かの議案を提出するためには、遅くとも2026年2月の常議員会には当委員会から素案を提出する必要があることを見据えて今後の作業を進める

黒田委員長は、有意義な議論のために当面は対面で委員会を開催することを望ましいとの考え方を示し、次回の委員会は3月19日に教団会議室で行うこととした。

（久世そらち報）

り、12月28日に第43回総会期第1回責任役員会を開催し、教団特別財産（非法人教会・伝道所の預かり財産）の処理が行われたことが報告された。更に道家幹事は、2025年2月27日、西早稻田教団会議室で実施されることと、受験者は補教師32名、正教師12名、転入審査2名であることを報告した。この他に、農村伝道に関する協議会が2月18～19日にアジア学院を会場に開催されることと、能登半島地震支援募金が、教団に8,800万円、中部教区に7,000万円挙げられているとの報告がなされた。現在、総幹事の下で「能登災害ボランティア窓口」を設置していることが報告された。最後に、大三島義孝財務幹事より、財務のDX化の導入が実施され、伝票類を電子保存しペーパーレス化に取り組んでいることと、収益事業会計の未収金に関して

カート問題相談会

◎日時 2025年3月28日（金）午後1時～3時
会場 日本キリスト教会館（4階B会議室と小会議室）

（川村尚弘報）

154回

神奈川教区総会報告

教師試験が「不当とまでは言えない」との決議が議案化

この議案は、「今なお解消されていない教師検定問題を巡る問い合わせ、教区が誠実に向き合って、議案第2号の着手礼歩みを深める決意をもつて、議案第2号の着手礼の執行を、総会に上程することを決議する」ため、この議案は、「今なお解消されていない教師検定問題を巡る問い合わせ、教区が誠実に向き合って、議案第2号の着手礼歩みを深める決意をもつて、議案第2号の着手礼の執行を、総会に上程することを」との文言を削除する修正議案が提案され、134名中68名（過半数67名）の賛成をもってこの修正案が可決された。

その後、第2号議案によつて1名の着手礼執行が可決され、着手礼式が行われた。

その後、第2号議案に

【教職】古谷正仁（蒔田）、秋間文子（茅ヶ崎南湖）、井殿準（翠ヶ丘）、佐野匡（横浜本郷台）、原宝匡（上大岡）、寺田信一（横須賀小川町）

【信徒】本城勇介（鎌倉雪ノ下）、大西誠（横浜指路）、岡安博（鶴見）、齊藤圭美（高座渋谷）、沖田忠子（横浜港南台）、古賀健一郎（紅葉坂）

【議長】飯田輝明（溝ノ口）、【副議長】宮川忠大

【書記】難波信義（大船）

【常置委員選挙結果】

【教職】古谷正仁（蒔田）、秋間文子（茅ヶ崎南湖）、井殿準（翠ヶ丘）、佐野匡（横浜本郷台）、原宝匡（上大岡）、寺田信一（横須賀小川町）

【信徒】本城勇介（鎌倉雪ノ下）、大西誠（横浜指路）、岡安博（鶴見）、齊藤圭美（高座渋谷）、沖田忠子（横浜港南台）、古賀健一郎（紅葉坂）

【議長】飯田輝明（溝ノ口）、【副議長】宮川忠大



「パレスチナ問題解決の希望」と題して

2月11日、八幡浜教会を会場に四国教区南予分区2・11信教の自由学習会が開催された。講師に山本光一氏（隠退教師）が、「パレスチナ問題解決の希望」。出席者は会員の友人なども含めており、関心の高さがうかがえた。山本氏は最後のパレスチナ訪問から帰国しておよそ10日後に紛争が始まったとのことで、パレスチナ現地での出会いやことを知らされた。ヘブ

経験から鳥瞰図ではなく「虫瞰図」で語ってくれた。ハマスとイスラエルの戦争の原因はイスラエルによる入植植民地主義、占領戦略であり、絶望的だが諦めではないとの言葉で始まった講演では、抑圧され過酷な状況にあっても明るさを失わず、決して諦めないパレスチナ人の姿勢や、イスラエルにおいても占領政策に反対するユダヤ教のラビたちがいることを語られた言葉が今も

【四国教区南予分区】

関心と意思表「不こそ解決の希望」



41名が共に集う

誰もが、どこに立ってこの年を迎え、次の一步を踏み出すのか問われます。わたしたち日本の信仰者は、80年前、日本国憲法が施行され、信教の自由が保証され、誰もが自由に信仰生活を守ることができる恵みをいただいた、その原点に立ち帰り、秋永好晴教師（久留米櫛原教会牧師）を講師に迎え、「バルメン宣言」に拝をきさせました。その後、秋永好晴教師（久留米櫛原教会牧師）を講師に迎え、「バルメン宣言」を話しを始めた。その

マルティン・ニーメラーが神さまから問われ続けるべきとの思いをもつて、参集者一同で開会礼を行いました。この宣言の起草に関わったカール・バルトの「明確さなしには何ら決断し

